

## 【ご参拝の皆様へ】

### 勤行：仏説阿弥陀経について三二解説

#### ●経典の特徴、舞台について

『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』とともに「浄土三部経」と称される浄土教聖典の一つ。比較的短いため、各種在家勤行集にも掲載され、日常の勤行はじめ多くの仏事に読誦される。

古代インド・サンスクリット語の原題は「極楽の莊嚴」「幸あるところの美しい風景」。仏典一般と異なり、弟子の質問に答える形式ではなく、問を待たずに釈迦牟尼世尊自ら説かれた経であるため「無問自説経」「一代結経」とも呼ばれる。

場所はインド中部コーサラ国の首都・舎衛城にあった大寺院・祇樹給孤獨園（祇園精舎）。大勢の弟子や菩薩らが聞き入る中、釈尊が智慧第一の長老・舎利弗尊者（サーリープッタ）に対し、阿弥陀仏と極楽浄土について次々と語ってゆく。

#### ●前半は極楽浄土のパワフルな描写

浄土とは、地獄・餓鬼・畜生など迷いと苦しみの六道輪廻から解脱した悟りの世界。阿弥陀仏が建立した浄土を極楽という。数々の宝玉で飾られた樹々や池、階段、黄金の大地や美しい音楽と花など、極めて麗しく浄らかな風光は、阿弥陀仏の智慧と慈悲の広大なはたらきをあらわすものだ。

「ここから西の彼方に極楽とよばれる世界があり、阿弥陀仏という仏が今まさに法を説いておられる。極楽に生まれたものたちは一切の「苦」が無く様々な「楽」のみ享受する。彼らはみな覺りを求め、必ず仏に成ることが決定している」（意識）

#### ●阿弥陀仏の名を称えて進む浄土への道

娑婆世界で迷い苦しみ多い衆生は、ぜひとも極楽へ生まれたいと願い、そのために一心に阿弥陀仏の名を称えて念仏することを説く（執持名号）。

「この教えを聞いたからには浄土へ生まれたい

と願うがよい。なぜなら、極楽では全ての人が、共に本当に出会っていける世界がひらかれてくる。わずかな善業・功德を積むだけでは往生はできないが、『南無阿弥陀仏』の六字名号をしつかりと念仏すれば必ず往生することができる」（意識）

### ●後半は保証人集団からのダメ押し

大宇宙の無数の諸仏方が、この教えが真実であることを証明し念仏を勧める。諸仏とは、単に仏や菩薩というだけではない。無始以来、ご縁の中で私を動かし、「ただ念仏して、どうか真の幸せに氣付いてくれ」と願われた、無数の方々も意味しよう。供養すべきは念仏念法念僧の三宝である。

「東南西北上下の世界に無数の諸仏方がおられ、阿弥陀仏の不可思議な功德を誉め讃え、真実なることを証明して下さい。そして『世の人々よ、阿弥陀仏の功德を称え、無数の諸仏に護られていこの経を信じなさい』と口々に言われる」（意識）

◎「仏教や仏さんは何を教えてくれるの?」

釈尊の悟りは二五〇〇年のあいだ、様々な時代・地域を通じて継承され、バージョンアップされてきた。四諦、縁起、空、唯識などこの世の普遍的な道理や教えは、我々の苦を救う抛り所となり、現代の心理学や物理学とも親和性をもっている。

仏陀とは真理に目覚めた人をいう。阿弥陀はアミターユス＝限りのない寿命、アミターバ＝限らない光という意味で、過去・現在・未来の三世における全ての衆生を救う仏である。とすれば他にもない「今この私」が目当てということだ。

煩惱が盛んで悟りに至らぬ末法の世＝五濁悪世の今、「南無（＝おまかせするの意）阿弥陀仏」の名号に込められた私への願いを信受して、暴走しがちなこの身の方向が定まる（応当発願生彼国土）。

◎「極楽に往くとはどういふことか?」

經典の表現には何かメッセージが託されていて、

極楽浄土も、単に「死後のユートピア」ではない。

阿弥陀仏の願力によって往き生まれるのだから、どんな人生を送ろうとも、皆ひとつにとけあう俱会一処の世界。「誰と一緒にいてもよく、しかも苦しめない」ということは、浄土の「絶対平等性」と、その名の通り「絶対的安楽」をあらわす。

経文には「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」とあり、浄土に咲く青い花には青い光が青く輝き、どの花も自らの色そのままで光り輝くとある。どのいのちも等しくかけがえないはずだが、ついでと比較して優劣をつけずにいられないのは、私の自我が重い病を抱えているからだろう。

阿弥陀仏自身の願いと徳行によって、衆生の煩惱・我執が消滅した結果極楽世界が成立し、往生成仏という仏果を享受できる。つまり私がいかなる最期を遂げようが、霊になるとか二度と自我を再生産し輪廻することはない。これが他力（本願）往生による救済・解放のすがたである。

◎「念仏しなさいってクドくない?」

阿弥陀仏がその浄土とともに今働いていて、そこに往けるのは称名念仏一つだという説は、にわかには信じ難い難信の法であると釈尊は言っている。

それは戒めや修行によって仏道は達成すべきという一種の思い込みが邪魔するからでもあり、同時に私自身が真摯に自らの生死、苦に向き合うことの困難さも示しているのではないか。

宗祖・親鸞聖人は二十年間修行しつつ、自身の愛欲名利に悩まされた末、念仏に出会って救われた。そして「念仏のいわれ（根拠理由）」を、法然聖人ほか祖師の教えをもとにあきらかにしていく。その姿は、「なぜ仏はこの私に念仏を勧めるのか」と常に自分自身を問いながらの仏道であった。

◎「自己チューではいけないと思うのですが。」

極楽国土という理想が示されたなら、我々衆生もこの娑婆世界をできるだけ近づけていきたい。

それにはまず、現実における汚れを正しく見て（八正道の正見）、次のステップを実践していくこと。

ただしそこで現れる困難さは、自己の都合に邪魔なものを拒絶し、取り除こうとする私の浅ましさだ。そしてそれをもし排除すれば、自らをかたちづくり支えてくれるはずの世界も失ってしまう

（二つの頭を有して反目し合ったという共命鳥）。

我々は一見個別に見える命が網の目のように相互作用しながら（諸法無我）、自他ひとつながりの「いのち」を生きている。私の、あなたの、という所有物としてでなく、我が思いより先に立って私を動かす働きが、「いのち」という現象だ。

「我」を守らんとすれば、真実を逆に見て転倒（てんどつ）し相手を排除してしまふ。しかし本当に排除すべきなのは、目先の自己中心性をあおり、執着（しゅうじやく）させ、因縁生起（縁起）の道理に背く偽りの在り方のほうではないか。

それを仏教では罪業深重として嚴重に注意して、

その連鎖を自覚的に断ち切っていく利他の実践を日々の目標とする。人間の尺度で量れない不可思議に出会って自己の囚われに気づき、偽りでない価値目標が見え始めたとき、執着し迷い苦しむ一方、深い安心（あんじん）で支えられるに違いない。

◎「悟りもいけど娑婆にも未練あります」

尊い教えだと分かってても、我々の深層エゴに潜む「変わるの面倒くさい」現状維持機能は強力だ。

ゆえに諸行無常の教えが意味をなす。この世の縁が尽き、極楽往生すれば決して後戻りせず（不退転）、仏を補う菩薩の仲間入りをして（一生補処）、生前に縁のあった人々に慈悲を働く存在となる。

今までもこれからも、誰かが誰かの菩薩として出会う物語がここに開かれる。私へと恵まれたこの娑婆世界が尊く有り難く、未練も執着も滅しないがその意味が転ぜられ、つくり変えられてゆくのだろう。（編集・報恩寺 林 暁 R三年改）